

## Margaret Atwood の *Dancing Girls* における犠牲者たちの“Survival” —カナダ文学における犠牲者としての主人公たち—

薬 師 英 子\*

### “Survival” in Margaret Atwood’s *Dancing Girls* — The Victim Complex of Heroine —

Eiko YAKUSHI\*

#### Abstract

The following study examines the survival of the heroines in Margaret Atwood’s *Dancing Girls*. The book is a collection of fourteen short stories which are all narrated by a heroine except the two titled as *Polarity* and *Training*. Each story’s heroines are victims of the society in some ways and suffer from their own conflict, such as identity loss, mental or physical disability and victim complex. The story takes place in 60’s to 70’s in modern Canada and most of the heroines are about in their twenties to thirties as the author herself when she published the collection. The heroine’s narrative depicts the world from the minor side of the view as female and tells the reader what really is behind their spoken words and how they truly feel. Through the female point of views, Atwood shows the reader what is really behind the society. In this paper, I would like to examine each of the heroine’s victim complexes and analyze them in four types. Also, I would like to look in their struggle with communication difficulty which is one of the themes of the collection.

#### 序論

Margaret Atwood (1939-) の *Dancing Girls* は1971年から77年までの短編14編が収録されている。<sup>i</sup> いずれも、2作品を除いては、20代～30代の女性たちが1960年代以降のカナダを背景とした社会でそれぞれの葛藤や犠牲者意識を感じながら日々を“survival”「生き抜く」姿が描かれている。この作品の著者であるアトウツ

ドは自身の著書「サバイバル—現代カナダ文学入門—」において、カナダ文学には常に「犠牲者」が登場し、作品はその「犠牲者」の苦悩や、葛藤、失敗を耐え「生き残る」姿が描かれるとしている。*Dancing Girls* の主人公である女性たちもまた、時に異文化の混在するカナダ社会、女性、身体的な障害などが要因で自己を抑圧される社会を“survival”する象徴的な存在である。

\*駒沢女子大学 非常勤講師

i マーガレット・アトウッド、『ダンシング・ガールズ』岸本幸子訳、白水社、1989

<sup>ii</sup> 主人公の女性たちは例外なく誰もが貸アパートの主人や住人、社会の固定概念、夫や恋人、患った心や身体にという狭い囲いの中で誰かの所有物や管理下に置かれた“victim”「犠牲者」でもある<sup>iii</sup>。

本稿ではではまず、*Dancing Girls* に登場する主人公たちの置かれている社会環境や行動、内面の変化からカナダ文学作品に描かれる犠牲者としての姿を考察し、アトウッドの「サバイバル—現代カナダ文学入門—」にそって分析していきたい。また、作品を通して描かれる「他者とのコミュニケーション」の難しさに焦点を置き、主人公たちのアイデンティティの模索や女性であるための抑圧される言動、異文化の容認と拒絶といった葛藤の中で変化する語り手の思いを読み解いていきたい。

## 1.

### 1-1：犠牲者としての主人公たち

マーガレット・アトウッドは自身の著書『サバイバル—現代カナダ文学入門—』において、カナダ文学の中心には「犠牲者」とそれに似かよった者たちが多種多様に存在していると分析している。それはつまり、カナダ版『モービアー・ディック』が存在するなら、作品は搾取する側の漁師の観点から書かれているのではなく、搾取される側の白鯨の立場から書かれているというものだ。カナダ文学に描かれる犠牲者とは、先住民の犠牲者、開拓者の犠牲者、移民の犠牲者、芸術家の犠牲者、芸術家の犠牲者、

女性の犠牲者、ケベック州の犠牲者、家庭における個人という犠牲者、自然における人間という犠牲者、人間による自然などがある。アトウッドの短編集 *Dancing Girls* の主人公たちも例外はなく、登場する主人公たちは本が出版された当時、1970年代を背景とするカナダ社会において何らかの犠牲者となっているのである。*Dancing Girls* に登場する主人公たちは、編集されている短編作品の1つ“Polarities”で大学の教員として登場する Morrison と、“Training”で障害を持つ子供たちのカウンセラーとしてキャンプに参加している Rob の2人の男性の語り手を除いて、全員女性であり、またその大半が女子学生や当時のアトウッドと同年代（30代前半）の女性の視点から描かれている。ここでは登場する女性たちをアトウッドの著書にならって4つの立場の犠牲者に分析していきたい。

アトウッドは犠牲者の基本的な立場を4つに分析している。1つ目に、「自分が犠牲であることを否定すること」である。この立場において犠牲者、たくさんのエネルギーを使い果たしてしまう。つまり、わかりきったことをくぐくぐと説明したり、怒りを抑制したり、確かにそれとわかる事実が存在しないかのようにふるまうことに時間をとられる。この立場がとられるのは普通と同じ犠牲者のグループの中でも他の者よりは少しばかりよい状態にいる者によってである。彼は自分たちのもっている特権が失われるのを恐れ、犠牲者であると認めるのをこわがっているのだ。それだから、そのグループの

ii アトウッドによると、「カナダの中心的な象徴は、それが英語で書かれていようとフランス語で書かれていようと、疑いもなく生き延びること survival」で、これがカナダ文学の主要なテーマであると言う。また、survival というテーマに関連して、「カナダ文学のなかに多すぎるほどの犠牲者 victims を見いだす」と言って victim complex も同時に重要なカナダ文学の特徴であるという。森本まゆみ、Margaret Atwood の *The Handmaid's Tale* について、p. 63、論集：神戸大学教養部紀要/神戸大学教養部 [編]—43, pp. 61-78

iii アトウッドは *Survival* の中で、カナダ文学に現れる犠牲者意識の一例として、狩り立てられ殺される動物との自己同一化のテーマを指摘しているが、動物との同一化や小児感覚とは、アトウッドのヒロインたちにも共通する心理である。英語青年：the rising generation. 136巻 馬場 美奈子 Margaret Atwood (カナダ)：The Handmaid's Tale (現代英語圏女性作家の話題作〈特集〉p. 490

中の残りの人々が不利な立場に甘んじなければならぬことについて、理由をなんとか説明しなければならなくなる。「私はそれを成し遂げました。したがって、われわれ犠牲者ではないのは明らかなことです。あの人たちが幸せでないならば、それはあの人たち自身が悪いのです。（ごらんなさい）自分たちが利用できる機会はいくらでもあるではないですか」といった具合に。立場一の犠牲者たちが怒りを覚えるとしたら、それは自分の仲間の犠牲者たちに、特に自分が犠牲になっている事情を話そうとする者たちに向けられる。立場一の「基本的ゲーム」は、「犠牲者としての自分の体験を否定せよ」である。

この犠牲者に当てはまるのが“The Resplendent Quetzal”の主人公 Sarah である。この作品は、もう長い間お互いの本心を偽り続けている仮面夫婦の物語で、お互いの心の中でしか語られない本心の描写がいかにも夫婦の行き違いが深いのかを如実に物語っている。妻である Sarah は数年前に流産を経験してから、自分の半身を失ったような大きな喪失感から夫からも心が離れていく。物語の舞台は夫婦の旅行先の観光地で交わされる二人の会話と行動を軸に進められる。妻 Sarah は“sacrificial wall”の隅の近くに腰掛け、期待外れのその井戸と夫との間にある不信任感や違和感に思いをめぐらす。Sarah の目の前にある「犠牲者の井戸」は、彼女が想像していたもっと小さい願かけ井戸のようなものとは異なり、かなり大きく、底に見える水も澄んでいるどころか、泥水で井戸の壁の一方には 葦が生え茂り、木の根やつるが石灰岩でできた井戸の水面まで垂さがっていた。作品の冒頭から Sarah の期待するものと現実の違いが暗示され、井戸の濁った水はまさしく二人の夫婦関係を象徴していることが、その後の描写で明らかになる。バードウォッチングが趣味である夫を内心軽視している Sarah は、2

人でバードウォッチングに出かけると見えてもいない鳥がいたように嘘をつき、夫がその存在しない鳥を追うように仕向けるのだ。夫は興奮したように顔を赤らめて鳥を追うが、実は夫は妻の悪意のある嘘に気付いていて、顔が赤らむのは怒りからであることが判明する。互いに嘘を重ねていくうちに、相手の真の人格を見失ってしまった2人の姿は、存在しない鳥をあてもなく追い続ける姿そのものである。子を失い、もはや修復は難しいと思われるほど冷え切っている夫婦の関係を考えれば、Sarah は母親としての女性、そして妻としての女性の成功どちらにも失敗している犠牲者である。しかし、彼女は平常心を装い、物事を客観的に捉えることで頑なに自分が犠牲者であることを拒否し続ける。旅先で目に留まり、思わず手に取ってしまった小さな子ども姿をしたおもちやが原因で Sarah は感情を抑えきれず泣き出してしまう。そんな妻に夫は「君らしくない。」と声をかける。Sarah は内心「これが私なのに。」と思いながらも、それを押し殺し、夫が望んでいる落ち着き払ったいつもの妻を演じる。自分が犠牲者であることを否定する抑圧は夫や弱いもの、他の犠牲者に対しての怒りになり、自分の弱さを隠し通すことで Sarah が偽りの勝者、夫の支配者として生き残ろうとする。

## 1-2；犠牲者：立場その2

アトウッドの定義する犠牲者の立場の2つめは次のように分析される。「自分が犠牲者であるという事実を認めるが、これを運命の仕業・神の御心・生物学上の要請（例えば女性の場合）・歴史によって定められた必然性・無意識・他の一般的で強大な概念などによって説明すること」どの場合にも悪いのはこの強大なものであって自分が悪いのではないのだから、自分の立場をとがめられたりすることもありえず、そ

れについて何かすることを期待されることもありえない。犠牲者は諦めてじっと耐えるか、あるいは無駄な抵抗をして空騒ぎすることができる。後者の場合には、そうした反抗が馬鹿げていて邪悪なこと（他人に）思われるのはもちろん、自分でもそう思えてくる。そのうえ「競争や試練に」負けて罰を受けることを期待するようになるだろう。なぜなら、いったい誰が運命（あるいは神の御心・生物学）と戦えというのか。この第二の立場を考えるとときには2つの留意点がある。まず、上記にしめしたような言い訳（説明）をすることで、実際には自らの受難のもととなっている原因をなにか他のものに置きかえしてしまう。ごまかしの原因があまりに巨大で霞がかかっているの、変えられないと言っていれば済まされる。自分の状況（たとえば気候）のうちどれほどが不変のもので、どれくらいが変化しうるのか。習慣・伝統から自分が犠牲者でなければならない必然性は、どれくらいなのか。そういったことをきめることなど、永久にしないでよいのである。怒りがそんざいするならば、あるいは、このカテゴリーに属するものはみなこの強大なものより劣るのは明白なので冷笑されるというのなら、その怒りや冷笑は仲間の犠牲者と自分自身の両方に向けられている。つまり、立場二の「基本的ゲーム」は、勝利者対犠牲者である。

“The Man from Mars”の主人公である Christine は、この自らが犠牲者であることを甘受してしまう立場の一人である。テニスをした帰り道、家に向かうために足早に公園を横切っていると大学生である Christine は一人の外国人から道を尋ねられる。高校時代に国際クラブの部長も務めた Christine は、社交的な歓迎の笑顔で一風変わったそのアジア系の外国人の要望に応え、地図を描き、戸惑いながらも要求されれば彼女の名前も紙に記して、足早にその場を後にする。

やがてその外国人の男性が Christine の自宅番号をつきとめ、彼女の家にやってきました、毎日大学のキャンパス内で彼女のことを追跡するようになるが、Christine はその行為に抗議しつつも、自ら警察に訴えるほどの行動には至らず、彼の行動に翻弄される。また裕福な家庭に育つ大学生の Christine は（途上国と思われる）移住者の少女を雇い、家事を任せる母親の考え行動を批判的に見ていて、自分が富裕層の家庭にあることに一抹の後ろめたさも感じている。しかし、自分もその恩恵にあずかり、就職は父のコネで政府の関係機関に努めたいと考えている。

### 1-3；犠牲者：立場その3

3つめは、「自分が犠牲者であるという事実を認めるが、その役割が避けられないものだ」という前提は甘受せず拒否する」という立場である。例えば、「私が何をされてきたか見てくれ。これは運命ではない。神の御心でもない。だからこそ私は自分を運命で定められた犠牲者と思わずことはしないのだ」という風に。別の言い方をすれば、犠牲者の役割（その必要など何もあいつきですら、この役割をもつことによって自分から犠牲になってしまうのだが）と、自分が犠牲になるようにした客観的な体験との区別ができる。おそらくさらに一歩進んで、彼が努力するならば、客観的な体験のほどが変化するかを見きわめられるようになる。これは静的なものというより、むしろ動的な立場である。

この立場は、カナダ文学において犠牲の対象として描かれる動物と登場する女性が投影されている作品“Polarities”にみられる。*Dancing Girls* で男性の語りで描かれる“Polarities”は、語り手の大学教員である Morrison が徐々に精神を病んでいく同僚の Louise の奇怪な言動に翻弄されながらも、やがて彼女を愛していたことに気づかされる物語である。まだ Louise が



精神を病んでいるような顕著な症状が見えなかった頃、Morrison と Louise の 2 人は彼女のお気に入りの場所である動物園を訪れる。Louise はとりわけ野生らしさを残すオオカミを好み、2 人はフェンス越しに彼らの姿を眺める。物語の終盤、精神病院に収容されすっかり変わり果てた Louise と面会した帰り道に Morrison は再びかつて 2 人で訪れた動物園へと車を走らせる。車から降り、フェンス越しにオオカミの姿を探す Morrison の行為は、まさに今は見る影もないかつての Louise を探しているのに他ならない。かつては独自の世界観や意見を持ち、自由奔放で予測できないような行動を見せ、まさに自然界の動物のような魅力を持っていた Louise は、今となっては彼女自身の病んだ精神と物理的には病院という管理下に閉じ込められてしまっている。フェンスの中に生きるオオカミたちは人間社会の生み出した犠牲者であり、また、現代カナダ社会で苦悩し、精神を病んでしまった犠牲者である Louise を投影している。《冷たいカナダの冬の風に吹かれながら 1 人オオカミたちいるはずの空間のフェンスの前に佇む Morrison の近くにいつの間にか 1 組の夫婦が立っている。閉演間際にたまたま居合わせたこの夫婦に、Morrison は「このオオカミたちはカナダオオカミでしょうか。」と質問する。すると夫婦の妻は Morrison を一瞥するなり、「あなたはこの辺りの人間ではないわね。」と付け入る隙もなく突き放す。

## 2. 他者とのコミュニケーション

*Dancing Girls* で犠牲者である主人公たちの「生き残り—サバイバル—」と同様に、ほぼすべての作品に共通して描かれているテーマが他者とのコミュニケーションの難しさである。その他者は時に異なる習慣や価値観を持つカナダ人同士であり、異文化を持つ人物、同僚、異性、

恋人、夫婦、友人、同性、同じアパートの住人、たまたま居合わせツアーク客であったりする。彼らは一様に相手と平和的な関係を保つことに苦悩し、失敗する。その要因は、自分の主張を相手に強要し過ぎること、忍耐の限界、言語や文化の違いから生じる不安や誤解、性の違いとさまざまである。しかし、そこにみえるのはいかに自分の真意を相手に理解してもらえるように伝え、また自分も同じことを相手に返すことができるかの難しさである。ここでは主人公たちの葛藤とその葛藤に対してのそれぞれの対応を考察し、物語に描かれるカナダ文学的要素を検証していきたい。

### 2-1；自己認識：アイデンティティの模索

カナダはヨーロッパからの白人系移民によって開拓された土地であり、つまり「カナダ人」自身にとっても見知らぬ領土なのだ。先住民にとっては「南の人間」の見知らぬ文化に飲み込まれた異様な土地であり、白人移民にとっては植民地時代の宗主国に抑圧された時代、強大なアメリカを隣国にもつ時代と常に生き残りを強いられる環境であった。そこに生活する誰もが移民ともいえるカナダは多文化国家として、アメリカのようにすべての国民が入り混じった国家ではなく、モザイク国家としてそれぞれの文化を保ったまま共存する国家のあり方を選んだ。それは、国民を融合し、ナショナリズムから始まり、インターナショナルになったアメリカがある一方、個々の民族文化を残したモザイク文化を掲げるカナダはナショナリズムが弱く、それぞれの民族的な期限を拭い去ってしまえば「カナダ的」アイデンティティは何もなくなってしまうという側面も持っている。こうした経路から、カナダ文学の主人公は自分がどこから来たのか、そして、ここはどこなのかというアイデンティティの模索に苦しむのである。

自分の居場所を得ようとするカナダ人の苦悩は、『Dancing Girls』の最初に登場する作品“The War in the Bathroom”にも描かれている。“The War in the Bathroom”は、引っ越しを済ませたばかりのある一人の女性の月曜日から日曜日までの一週間の細かな日常の様子が描写されている。一見、以前住んでいたアパートよりも清潔そうで、暖房完備もされ、快適そうに思えた部屋が翌朝には、隣の部屋にある住民共有の洗面所の音が筒抜けであることが判明する。階下に住む男性は毎朝決まった時間に洗面所に入り、激しく咳き込み、不快な音をたてながら、30分間も洗面所を使用する。初対面では好印象であった階下に住むこの初老の男性に、彼女は次第に嫌悪感と敵意を抱くようになる。我慢の限界を迎えた日曜日の朝、男性がいつも洗面所を使用する9時より20分間に目覚ましをセットしておいた主人公は、9時10分前に洗面所に入り、鍵をかける。浴槽にお湯をはり、お湯につかりながら時計の針を確認して待っていると、いつも通り、男性は9時に洗面所にやってきて数分おきに催促するようにドアをたたく。彼女が笑い声をもらさないようにこらえながら無視し続けると30分、男性は激しく咳き込みながら諦めて階段を下りていく。しかし、男性が窒息しているかのようなうめき声が聞こえた後、床に何かが落ちたよう激しい音がする。

貸アパートという小さく狭い空間で一つの洗面所を巡り繰り広げられる争いで、最終的には一人の命が失われる。日常の些細なわだかまりが募り、忍耐や許容の籠が外れたとき、思いもよらない結果につながるということをアトウッドは皮肉たっぷりのユーモアで描いている。異文化もつ住民との間ではなく、同じ言語と文化を持つカナダ人同士であってもそれが引き起こされることが語られるこの物語は、現代のカナダ社会だけでなく世界全体に共通する人間同士

の衝突をテーマとしている。場所も人物も具体的に限定され、とある貸アパートの片隅と非常に狭い空間での出来事が、実は世界中のどこのだれにでも共通することを描いていて、この小さな貸アパートが社会の縮図で縮図であることを読者に示唆している。

カナダの移民を受け入れ、異国文化を容認する忍耐が途切れた瞬間を描いている。

『コスチュームとパワー・ポリティックス』“Dancing Girls”で学生用の貸アパートの女主人であるミセス・ノーランは入居してきたばかりの男子学生の部屋をノックすると、早速彼に伝統衣装を身に着けて階下の大家一家の住む部屋を訪ねてほしいと声をかける。表向きは彼女の2人の子供たちが喜ぶからとしているが、実際には新しい入居者が何者であるのか情報を得ようとするミセス・ノーランの意図がうかがえる。他者を家に招き歓迎しているようにも映るが、上下関係が見え隠れしている。ここにも、自分が支配する立場にあり、異文化を持つ他者を監視下に置き、やがてみずからの許容範囲を超えると、彼を排除する。

ヨーロッパ大陸からカナダに開拓者として移住してきた白人系のカナダ人は中東やアジア、ネイティブ・アメリカンが持つような一見してそれと認識できるような伝統衣装を持ち合わせていない。そのため、ヨーロッパ系カナダ人は自分たちとは異なる文化を持つ人物に彼らの伝統衣装を着せることで相手を異文化を持つ『よそ者』『部外者』『他者』として位置付けようとする。言語が伝わらないことで生まれる沈黙は、相手をより得体の知れない存在とし不安を生み、その不安はやがて恐怖心へと変わっていく。会話がなくとも相手は何者であるかを知る余地がある衣装（コスチューム・身だしなみ・外見）はコミュニケーションの最終的な手段の1つとも考えられる。コスチュームの相手に発信する

ものは、それぞれの文化が持つ伝統的な衣装に限られものだけではなく、入れ墨や髪形や服装を含む日々の身だしなみにも表れる。

## 結論

この作品は著者マーガレット・アトウッドが彼女の全ての作品を通して語るカナダ文学のテーマとする survival と victims complex を象徴する作品であると同時に、社会の根底にある問題を浮き彫りにした作品でもある。

小さな貸アパートで、隣り合わせの住人たちがお互い許容と忍耐を重ねながら生活する日々の姿は女性やカナダに限られたものではなく、読者の誰もが共感できる世界である。こうして、読者と主人公の共感性を誘うことで、作者はそれに続く作品が女性の視点で描かれた日常であり、より具体性をもった出来事であるにも関わらず、世界のどこにでも共通する問題を指摘している。読者は、時に主人公たちと同様に犠牲者でもあり、勝者や加害者、そして傍観者でもある。読者は、作品に具体的な日々の日常の姿が描かれることで、共有する言動を見出し、そこに存在するテーマがカナダ社会だけでなく全世界に共通する普遍的なものであることに気づかされる。また、どの作品も主人公が今後の行動を明確に示した描写や気持ちの変化を語る描写はない。そうすることで、作者は物語の結末を読者に選択させ、現実社会の抱える問題を提示すると同時に、読者の選択が社会のあり方を変える大きな一歩であることを伝えようとしているのではないだろうか。

## 参考文献

- Bloom, Harold. *Bloom's Modern Critical Views New Edition Margaret Atwood*, Infobase Publishing. 2009.
- Bloom, Harold. *Modern Critical Interpretations*

- The Handmaid's Tale*, Chelsea House, 2001.
- Bouson, J. Brooks. "The Misogyny of Patriarchal culture in *The Handmaid's Tale*", *Modern Critical Interpretations Margaret Atwood's The Handmaid's Tale*, ed. Harold Bloom. Chelsea House. 2001. pp. 41-62.
- Bouson, J. Brooks. "A Feminist and Psychoanalytic Approach in a Women's College", *Approaches to Teaching Atwood's The Handmaid's Tale and Other Works*, Ed by Sharon R. Wilson, Thomas B. Friedman, Shannon Hengen. The Modern Language Association of America, 2000. pp. 122-127.
- Cooke, Nathalie. *Margaret Atwood A Critical Companion*, Greenwood Press, 2004.
- Margaret. Atwood. *Second Words : Selected Critical Prose*. Anansi. 1982.
- Margaret Atwood. *Survival The Thematic Guide To Canadian Literature*. House of Anansi. 1972.
- Margaret. Atwood. *The Handmaid's Tale*, Seal Books, 1985.
- Nischik, Reingard M. *Margaret Atwood Works & Impact*. Camden House. 2000.
- Somacarrera, Pilar. "Power politics: power and identity". Howells, Coral Ann. *The Cambridge companion to Margaret Atwood*. Cambridge University Press. 2006.
- 大塚由美子、サバイバルと抵抗の物語— Margaret Atwood の *The Handmaid's Tale* —
- 伊藤節（編）『現代作家ガイド5 マーガレット・アトウッド』、彩流社、2008
- 馬場 美奈子「Margaret Atwood（カナダ）：The Handmaid's Tale（現代英語圏女性作家の話題作）〈特集〉」英語青年：the rising generation. 136巻
- 森本まゆみ、Margaret Atwood の *The Handmaid's*

*Tale* について、論集：神戸大学教養部紀要  
/ 神戸大学教養部 [編]—43, pp. 61-78)  
マーガレット・アトウッド、『サバイバル—現代カナダ文学入門—』、加藤祐佳子訳、御茶  
ノ水書房、1995  
マーガレット・アトウッド、『ダンシング・ガ  
ールズ』、岸本幸子訳、白水社、1989